



塩づくり(イメージ)

目 次

- ① 展示紹介 特別展「霞ヶ浦と太平洋のめぐみー塩づくりー」
- ② 収蔵資料紹介
一橋茂栄「老子図並讃」
平成24年度史料紹介展から
- ③ トピックス

「霞ヶ浦と太平洋のめぐみ ―塩づくり―」

平成 24 年 10 月 13 日（日）～11 月 25 日（日）

「塩」は、生物にとって欠くことのできないものの一つです。岩塩や塩湖の存在しない国に住む日本人にとって「塩をつくる」ことは「命をつなぐ」ことでした。

この大切な塩を霞ヶ浦沿岸の人々が作っていたことが、奈良時代に編纂された『常陸国風土記』に記されています。その塩を人々は、いつごろから、どのように作り始めたのか、そして今日までに塩とどのように関わってきたのか等を知っていただくとともに、塩づくりに関わった人々の心にも思いをはせていただきたいと思います。



主な展示内容について各章ごとに紹介します。

序章 ひたちのくにふ ど き 『常陸国風土記』

『常陸国風土記』に霞ヶ浦沿岸の「乗濱の里の浮島」で塩づくりが行われていた記述部分を展示します。そして、その塩づくりが、いつごろから、どこで、どのように始まったかを、皆様を次の章からいざなっていきます。

第 1 章 うちうみ 3000 年前の塩づくり ―内海での塩づくり―

塩づくりに使われた土器は、東日本を中心に見つかっていますが、その中で霞ヶ浦沿岸の製塩土器は、縄文時代後期の終わり（約 3,200～3,300 年前）のもので、現在のところ最古です。その塩づくりの様子などを製塩土器が見つかる広畑貝塚（稲敷市）、法堂遺跡（美浦村）、上高津貝塚（土浦市）などから紹介します。また、縄文時代の塩づくりを実験から紹介します。



塩づくりのジオラマ
上高津貝塚ふるさと歴史の広場



第 3 の土器（製塩土器）
広畑貝塚 茨城県立歴史館

第2章 2000年前の塩づくり うちうみ そとうみ ー内海から外海へー

東日本の土器を使った塩づくりの跡は、縄文時代の終わりころに見られなくなりますが、弥生時代の中ごろに、瀬戸内海で再び土器を使った塩づくりの跡が見つかっています。その技術は、各地に伝わりました。その様子を製塩土器の形の変化から紹介します。

また、茨城県でも奈良時代になると、わづみこん輪積痕のある製塩土器が見つかるようになります。そのような土器の広がりをご紹介します。

さらに、各地で作られるようになった塩が、税として都へ納められたこと（木簡）なども合わせて紹介します。



岡山県の製塩土器（ワイングラス状）
岡山県古代吉備文化財センター

愛知県の製塩土器（ロート状）
東海市郷土資料館



茨城県の製塩土器（奈良時代）
金木場遺跡
日立市郷土博物館



木簡（複製）
半田市立博物館

茨城県の製塩土器（奈良時代）
鹿の子遺跡
石岡市教育委員会

第3章 伝えられた塩づくり え ず しん じ ー絵図と神事ー

中世（鎌倉・室町時代）になると、塩づくりが絵図に描かれています。その様子を紹介し
ます。また、神事の塩づくりから古代の塩づくりの様子を探っていきます。



「親鸞聖人絵伝」（部分・鎌倉時代）

たばこと塩の博物館



『文正草子』屏風（部分・室町時代）

茨城県立歴史館

第4章 太平洋での塩づくり ー塩づくりのムラー

ひたちなか市阿字ヶ浦から東海村村松にかけては、砂丘が続いています。発掘調査で、砂
丘の中から塩づくりの跡が見つかりました。さわだ 沢田遺跡・ながすななぎさ 長砂渚 遺跡（ひたちなか市）、むらまつしら 村松白根
遺跡（東海村）の3遺跡です。それぞれの遺跡から出土した遺物（土器・鉄製品・石製品等）
や遺構（かんすい 鹹水をためる水槽・かまど 煮つめる竈等）、文献等から、いつごろから、どのような塩づ
くりが行われていたかなどを紹介します。

また、この地域に伝わる「千々乱風」伝説についても検証します。



ろ過器（第81号鹹水槽出土遺物）

沢田遺跡 ひたちなか市埋蔵文化財センター



第81号鹹水槽遺物出土状況

茨城県教育財団

附章 塩の道・陸でとれる塩

この章では、塩の運搬を通して、海岸部と内陸部を結ぶ物資の輸送路が整備されたこと
を、水戸市域の「塩の道」例にとりながら紹介します。

また、岩塩を中心に日本で見られない、世界の塩の生産方法の一端を紹介します。

◇関連イベント情報

1 講演会

- (1) 日 時 平成 24 年 10 月 28 日(日) 午後 1 時 30 分から
- (2) 場 所 茨城県立歴史館講堂 (要入館券)
- (3) 講 師 渡辺 誠氏 (名古屋大学名誉教授)
- (4) 演 題 「茨城縄文に始まる日本の製塩」

2 ミニ講座

- (1) 日 時 平成 24 年 11 月 4 日(日) 午後 1 時 30 分～午後 2 時 30 分
- (2) 場 所 茨城県立歴史館講堂 (要入館券)
- (3) 担 当 大津史料学芸部長

3 展示解説

- (1) 日 時 平成 24 年 10 月 14 日(日), 11 月 4 日(日), 11 月 18 日(日)
 - ※11/4 の午後の展示解説はミニ講座終了後
 - ・午前の部11時～(約30分) ・午後の部1時30分～(約30分)
 - ※特別展担当者
 - ナイトミュージアム:平成 24 年 11 月 2 日(金)・9 日(金)・16 日(金)
 - ※入館は、午後 7 時 30 分まで

4 「塩づくり実演」と「鹿角ペンダントづくり」(申し込みを締め切りました)

- (1) 日 時 平成 24 年 10 月 20 日(土)
- (2) 内 容
 - ①ペンダントづくり
 - ※先着 30 名(小学生以上、3 年生以下親同伴)、事前申し込み
 - ※ペンダントづくりの参加者は、時間で見学をします。
 - ※塩づくり実演は見学自由です。
 - ②塩づくり実演
 - ※歴史館の駐車場でつくった鹹水を竈で煮つめます。

(3) 場 所

- ①ペンダントづくり・・・茨城県立歴史館講堂
- ②塩づくり実演・・・・・・庭園

5 「紙芝居」と「DVD上映」

- (1) 日 時 平成 24 年 11 月 11 日(日) 午前 10 時 30 分・午後 1 時 30 分
2 回実施
- (2) 場 所 茨城県立歴史館講堂
- (3) 内 容 紙芝居「東海村の千々乱風」等 ※東海村民話再生の会協力
DVD「400 年前の最先端技術 塩造りのムラ」等

資料紹介 一橋茂栄「老子図並讃」(当館保管)



■尾張藩主として藩政に苦勞、『老子』へ傾倒

この作品は、将軍となった慶喜のつぎに一橋徳川家当主となった茂栄(もちはる)が、尾張藩主時代の安政6年(1859)に描いたものである。当時は徳川茂徳(もちなが)といい、前藩主で兄の徳川慶勝が尊王派を重用したのに対し、佐幕派を重んじ、両派の対立の中で苦心の藩運営を強いられていた。

そうしたなかで『老子』に親近感を得たものであろうか。讃は『老子』のなかから7章を撰び、さらに字句を絞り連書したものである。最初の「知る者は言わず、言う者は知らず。其の兌を塞ぎ、其の門を閉じ、其の鋭を挫き、其の紛を解き、其の光を和らげ、其の塵に同ず。是を玄同と謂ふ。(56章)」から、隠居後に「玄同」と称した。なお、最初の「老猫脰膝而蔵怪力」は明治15年に書き加えたものである。

文久3年(1863)には隠居に追い込まれるが、直後に陶製の老子像を造っている。

■水戸家の血を引き、松平容保の兄

茂栄は、天保2年(1831)に、尾張徳川家分家高須松平家当主松平義建の3男として生まれた。義建の父義和は水戸徳川家6代徳川治保の3男であり、治保の曾孫にあたる。

兄弟は多いが、とくに兄慶勝(尾張藩主)弟松平容保(会津藩主)、同じく松平定敬(桑名藩主)とともに幕末政治に大きな影響を与え「高須四兄弟」と称された。

嘉永2年(1849)、兄が本家を継いだため、高須藩主となり、ついで「安政の大獄」で兄が隠居させられると、第15代尾張藩主となった。その後、兄が復権すると隠居に追い込まれたが、将軍家茂とともに大坂城で長州征討問題にあたり、家茂から「親とも思う」という絶大な信頼を得るなど、徳川一門のなかでも重要な位置を占めた。

慶応2年(1866)末、将軍となった慶喜の命で、一橋家を相続した。

■徳川一門を代表して官軍に歎願、維新後の一橋家を支える

官軍側についた兄慶勝を除くと徳川一門の長老となることから、戊辰戦争にあたっ一門を代表して静寛院(和宮)とともに徳川家存続のため歎願の中心となった。

一方、一橋家は慶応4年(1868)5月、田安家とともに独立した「一橋藩」となったが、翌年末の「版籍奉還」では、茂栄は知藩事に任命されず廃藩とされた。当主として家臣のリストラ、新しい事業などに苦心し、明治17年(1884)に死去した。(永井 博)

■一橋徳川家記念室展示「一橋茂栄」平成24年11月27日(火)～平成25年1月20日(日)

■関連講演会

「一橋茂栄―激動の幕末維新―」 担当:学芸課長 永井博

日時:平成25年1月13日(日)14:00～15:30 場所:当館講堂

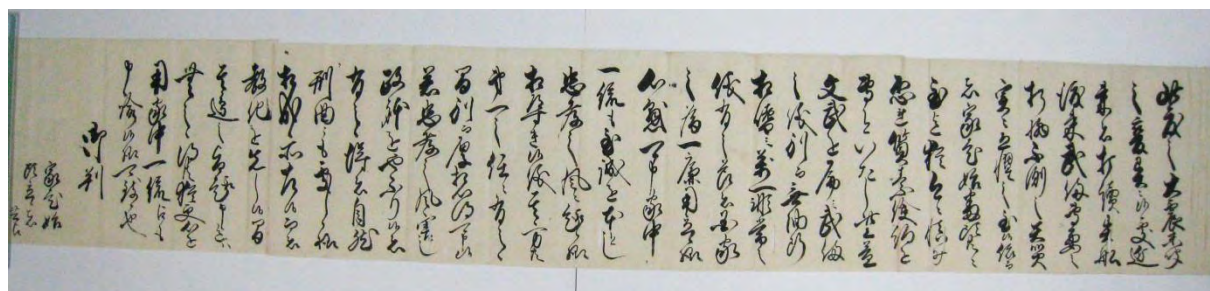
収蔵史料紹介～平成 24 年度史料紹介展から～

8 月 25 日から 9 月 30 日にかけて開催した、史料紹介展「史料にみる安政江戸地震」において展示した史料から、2 点を紹介します。

安政江戸地震は、安政 2 年（1855）10 月 2 日夜四つ時（午後 10 時）頃に発生しました。当時の記録から、震源は東京湾北部のやや深いところ、マグニチュード 7 前後の内陸直下型地震であったと推定されています。茨城県域においては、震度 4～5 強と推定され、少なからぬ被害がありました。また茨城県域の村々を知行する藩主や旗本ら領主の住む江戸の被災はさらに甚だしく、その復興のために茨城県域の村々がかかわったことなどもあり、安政江戸地震に関する史料は当地方に多く残されています。

【史料 1】「(大震及び異船渡来ニ付質素儉約武備之儀等家中一統相心得候様達)」

(岡崎家 No.70-2)



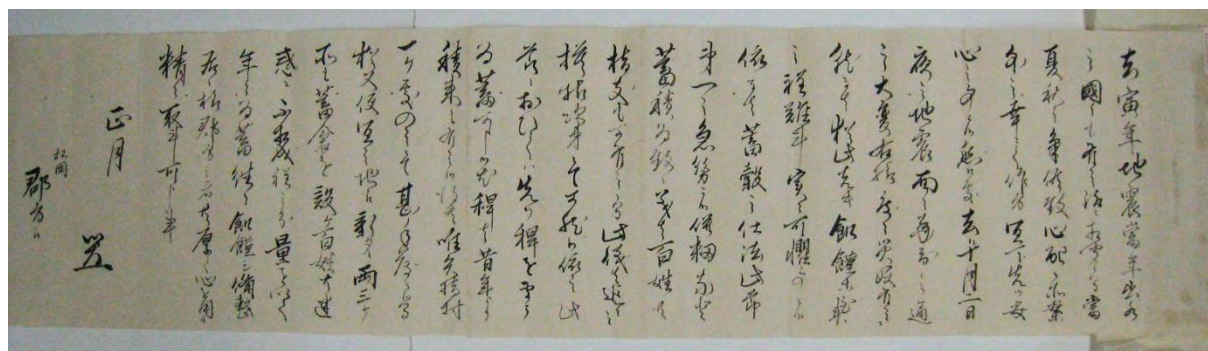
水戸藩譜代の重臣岡崎家に伝わる文書です。安政江戸地震の起こった安政 2 年は、斉昭が復権して幕政に参与し、水戸藩においては安政の改革を果敢にすすめている時でした。これより前弘化元年（1844）5 月斉昭は幕府から天保の改革の行き過ぎを咎められ、致仕・謹慎を命ぜられ、世子慶篤に家督を譲りました。藩主慶篤がまだ幼いため三連枝（高松，守山，府中の三支藩）の藩主が後見役につきました。ほどなく斉昭の謹慎は解けたものの、藩政に関与することは許されず、その期間は嘉永 2 年（1849）3 月まで約 5 年に及びました。しかしながら致仕・謹慎以後続けていた老中阿部正弘との手紙のやりとりを通じて、海防問題への見識を買われ、ペリー来航後の嘉永 6 年 7 月幕府の海防参与を命じられ、復権となったのです。

この文書は「家老始頭立候者共江」と家老以下の重立った家臣に宛てたもので、「御判」とあるのみで誰が出したものか不明ですが、内容から斉昭の花押が押されていたと推測されます。今回の大地震を「未聞の変異」とし、近年うち続いての異国船渡来につき武備専要の時に不例の天変は「実に恐懼の至」としています。このような時こそ質素儉約を専らとし、文

武に励み、武備に油断無く、万一非常の場合は国家のため役立つよう心がけること、至誠を本とし忠孝の風儀を導くのが家老始め番頭共の第一の任務だから、この時局に一層心がけ家中一統へも申し諭すことを達しています。

地震後の10月6日付阿部正弘宛書状では、斉昭は今回の震災を幕政「御改正」の好機ととらえ、改革を推し進めることを説いています（『水戸藩史料 上編乾』巻十四）、それは藩士に対しても同様だったようです。斉昭の目には震災復興だけでなく、大きく変動していく社会にどのように対処していくか、その道筋が見えていたのかもしれませんが。

【史料2】「(去る十月二日の地震ありこの先飢饉の備えとして蓄蔵を設けること取り計らう旨直書)」
(高橋キヨ家 No.236-2)



水戸藩付家老中山家中高橋家に伝わる文書です。付家老中山家は、家康により初代頼房に付けられた中山信吉を祖とし、松岡の地（現在の北茨城市南部から高萩市のほぼ全域）に1万5千石のち2万5千石を知行しました。松岡地方は、中山家の郡奉行が支配するなど、いわば水戸藩の中にあつて独自の行政が布かれていました。

この文書は安政3年正月に郡方、すなわち民生を司る役所に向けて出されたもので、差出人の花押はこの時の中山家12代当主信守です。信守は、近年の地震や洪水、気候不順などに続いて安政江戸地震と「度々の災妖」があり、この先「飢饉」もあやぶまれることから、「蓄穀の仕法」を第一の急務としています。そして粃を蓄えることは百姓の差し支えにもなるだろうから、まずは稗を蓄えることとし、これまでも稗は備蓄してきたけれども、矢指村1か所のみでは甚だ手薄であるから、新たに2、3か所に「蓄倉」を設けること、そして百姓の迷惑にならないだけの分量を年々備蓄し飢饉に備えるよう、郡方が細心の心配りで取り計らうことを命じています。百姓の負担に配慮しつつ、不測の事態に備えるという、信守の仁政が感じられる文面です。

(史料学芸部歴史資料課 笹目礼子)

トピックス

平成 24 年度 上半期の展示・行事から

企画展「新たな国民のたからー文化庁購入文化財展ー」8月25日(土)～9月30日(日)

文化庁が近年購入した文化財 42 件が展示され、好評のうちに幕をとじました！

絵画、書跡、能面と装束、彫刻、漆器・陶器という 5 つの分野から、後世まで伝えたい文化財 42 件を厳選。そのうちの 20 件が国指定重要文化財、2 件が重要美術品です。また、雪村や与謝蕪村など、茨城にゆかりのある画家の作品も見どころのひとつでした。

本展のような文化庁購入文化財展は、名古屋市博物館、仙台市博物館、岡山県立博物館に続き、地方の博物館での開催は第 4 回を数えます。普段は、東京、奈良、京都、九州の国立博物館に保管されている数々が、今年は茨城県立歴史館に集まってきたとあり、本展示を聞きつけご覧になったお客様は、身を乗り出して文化財の数々に見入っていらっしゃいました。



展示解説の様子

展示されたほんの一部をご紹介します
でも写真より実際、間近に鑑賞した折の
その優美さまでお伝え出来ないのが残念です



胴箱腰明木瓜格子文様縫箔 並笛図(部分)
(文化庁保管)

展示を見逃してしまった方に朗報です！今展示に合わせて、文化庁が作成したパンフレットー今展示 42 件すべての作品について紹介されています(オールカラー)ーご来館の皆様が無償で配布しております。なくなり次第終了とさせていただきますのでお早めにどうぞ。

歴史館探検ツアー 6月17日(日)

26 名の隊員が博物館の興味深い裏側を元気に探検しました。

集まった隊員は、事前に申し込んでいただいた 26 名の小学生とその家族。解説員の案内で、閲覧室の書庫、機械室、展示資料などを運ぶ大エレベーター、考古収蔵庫、文書整理保管庫など、普段は入ることができないエリアに足を踏み入れ興味深げに辺りを見回す姿や、当館研究員の質問に元気に答えを投げ返す姿が見られました。

特に、当館の川又清明首席研究員による塩づくりの説明では、産地や製法の異なる 3 種類の塩の味比べも行われました。「岩塩の方がしょっぱい。」「海水で作った塩の方が苦いかな。」などと、じっくりと味わい感想を述べてくれました。

塩づくりの詳しい内容は、10月13日（土）から当館で開催される特別展「霞ヶ浦と太平洋のめぐみ―塩づくり―」でさらに明らかにされます。

次回の探検ツアーは、探検コースも一新し、12月16日（日）に開催されます！



文書整理保管庫の様子



塩づくりについて学ぶ隊員たち

親子歴史教室「勾玉づくり」 7月15日（日）

当館の人気イベントの一つ「勾玉づくり」を親子で行う教室が行われ、事前申し込みいただいた60名の方々が、古代のアクセサリーづくりに熱心に取り組みました。「勾玉」とは、古代において祭事を行う人や位の高い人がネックレスのようにして身につけていた装身具です。メノウ、ヒスイ、コハクなどでつくられましたが、現代の皆様には、手軽に取り組んでいただける「ろう石」を使っています。

紙やすりで形づくり、さらに目の細かいやすりで水をつけながら磨くことにより、きれいに仕上がります。中にはヒョウタン型やハート型など、個性的な形も見られました。思い通りに仕上がったお子さんからは「磨くのが大変だったけど、またやりたい。」という感想が聞かれました。

次回の「勾玉づくり」は、平成25年2月17日に行われます！



勾玉づくりの様子

お父さんお母さんも一緒に一所懸命つくりました

歴史館まつり 8月25日（土）・26日（日）

25日（土）は、映画会と歴史講演会が行われました。川又首席研究員による講演会「塩づくり」は、この秋の特別展「霞ヶ浦と太平洋のめぐみ―塩づくり―」に向けたもので、その歴史に関心の深い約60名が集いました。

26日（日）は、当館が担当する展示解説や民家解説、よろい・かぶと体験、勾玉づくり、歴史館ウォークラリー、いにしへのピアノ体験の他、新莊小による管楽コンサート、県警コンサート、はしご車・地震・シートベルトなど各種体験車、昔遊び・体験遊び、カプラ（フランスの積木）、移動博物館、海の生き物タッチング、水戸第二高等学校によるお茶会、お菓子・アクセサリー販

売、水戸農業高等学校による生産物販売、茨城大学の学生による大道芸など、多くのイベントに、3,500 人を超える方々が集まりました。

特に、わくわくドキドキ子ども体験広場やミュージアムパークの移動博物館などが人気で、1 日中にぎわいを見せていました。また、当館の人気イベントの勾玉づくりにも多くの方が参加しました。

ご家族でお越しの方も多く、小さいお子様からお年寄りの方まで楽しんでいただき、「展示解説や民家解説がおもしろかった。聞いてみて初めて分かることがたくさんあった。」「1 日中楽しめました。」「お茶会でおいしいお茶とお菓子がいただけてよかった。」など、うれしい感想が多く寄せられました。

当館 2 大まつり！もう一方の秋の「歴史館いちょうまつりー「和の文化」の祭典」は、11 月 3 日(土)～11 月 25 日(日)に開催します。どうぞお楽しみに！



歴史館まつり会場の様子



県警コンサートの様子

歴史教室「一橋領とその支配」 9 月 8 日(土)

当館の柳橋首席研究員による歴史教室が行われました。

田安・清水両家と共に御三卿と呼ばれ、将軍家の身内として下総国など計 10 万石を分け与えられた一橋徳川家。下総国結城郡矢畑村(結城市矢畑)を中心に取り上げ、一橋領における支配の新たな一面を紹介した今回の歴史教室には、約 130 名の方々が集いました。

18 ページにわたる資料を手に、熱心に聞き入る参加者の皆様の姿がありました。

次回の歴史教室 12 月 8 日(土)「水戸藩に集まった家臣たち」

【担当】当館資料調査専門員 野内 正美

次回の茨城大学地域連携講座

12 月 15 日(土)「藩体制から府県制へー明治維新期の地域編成をめぐってー」

【担当】茨城大学人文学部長 佐々木 寛司 氏



歴史教室の様子

史料紹介展「史料にみる安政江戸地震」展示解説 9月16日(日)・9月22日(土)

安政江戸地震は、安政2(1855)年10月2日に発生したマグニチュード7前後の大地震であったとされています。その余波は、もちろん水戸藩にも及びます。本展の史料は、村役人の当日の様子を記した日記、互いの安否を気づかう手紙、江戸屋敷の復興のために木材や費用や人足を送る内容の文書、さらには、後の江戸幕府15代将軍徳川慶喜の婚儀が延期される旨の文書など24点で、当時の混乱ぶりや人情を垣間見ることのできる内容でした。これらは、茨城県内に残されていた古文書で、当館で閲覧可能です。

また、参考展示の版画「鯰絵(なまずえ)」は、大震災をもユーモラスに捉えた江戸庶民のたくましさを感ずる10点。

展示解説は午前と午後の各2回行われ、のべ90名の方々が集いました。担当の笹目首席研究員が古文書や鯰絵に記された内容をこまやかに説明すると、時折笑い声も上がり、江戸時代の人々のたくましさを当時の世相をご理解いただけたと思います。



展示解説の様子

他、上半期には沢山のイベント・行事が行われました。

下半期にも皆様にお楽しみ頂けるようなイベントをご用意してお待ちしておりますので、どうぞお気軽にお越し下さい。

各行事などについてのお問い合わせは、

茨城県立歴史館 教育普及課 電話 029-225-4425

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。

お知らせ

特別展開催期間中10月13日(土)～11月25日(日)の土曜・日曜・祝日に
挽きたてコーヒーをお楽しみ頂ける喫茶コーナーを開設致しました。
皆様のおいでをお待ちしております。



11月2日(金)・9日(金)・16日(金)は、午後8時まで開館します！
お仕事帰りに、ゆっくり、展示をご覧になってはいかがでしょうか。

11月13日(火)・17日(土)・18日(日)は、入館無料です！お誘い合わせの上ご来館下さい。